

第84回身心変容技法研究会

○ テーマ: 「楽園と身心変容」

開催方法: Zoom開催

日時: 2021年12月25日(土)13時~17時

13時 開会あいさつ・趣旨説明・発表者紹介 鎌田東二(司会進行、10分)

13時10分~14時10分 **谷崎テトラ**(京都芸術大学客員教授・楽園学会設立呼びかけ人代表) **「楽園と身心変容」**発表60分

14時10分~15時 鎌田東二 **「身心変容と至高の境地」**50分

15時~15時10分 (10分休憩)

15時10分~17時00分 (110分)

コメンテーター: 鶴岡賀雄(15分、東京大学名誉教授・宗教学)

コメンテーター: やまだようこ(15分、京都大学名誉教授・心理学・ナラティブ研究)

コメンテーター: 津城寛文(15分、筑波大学教授・宗教学)

コメンテーター: 村川治彦(15分、関西大学教授・健康科学部学部長・同研究科科長・宗教学・身体文化論) + ディスカッション

身心変容技法研究会

心と体とモノをつなぐワザの総合的研究 (2011年度-2014年度)

宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究 (2015年度-2018年度)

科研基盤研究A「身心変容技法の比較宗教学-心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」(2011年度-2014年度)

科研基盤研究A「身心変容技法と霊的暴力-宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」(2015年度-2018年度)



研究問答 (更新 21/12/18) NEW

研究会 (更新 21/12/18) NEW

2021年12月25日(土) 13時~17時 「楽園と身心変容」

奈良の大仏と鎌倉の大仏～その共通点と相違点



東大寺盧舎那仏像（華嚴経）



右上：鎌倉大仏（阿彌陀仏）

第84回身心変容技法研究会

楽園と至高の境地

楽園とは？

光
空
湖
山

水
樹
花

動物



至高の境地？

脱苦惱？

調和？

合一？

統合？

2021年12月25日 鎌田東二

本日の発表の問題点

- 1, 「楽園」のイメージとはどのようなものか？
- 2, 「失楽園」ないし「反楽園」としての現実があるがゆえに、「楽園」が希求される。
- 3, 「至高の境地」は「苦」や「悪」の「現実」を通して求められた。その「現実」は「実在」なのか？

「一仏成道觀見法界、草木国土悉皆成仏」

(『中陰経』?、『正法眼蔵聞書抄』詮慧、謡曲『鶴』など)

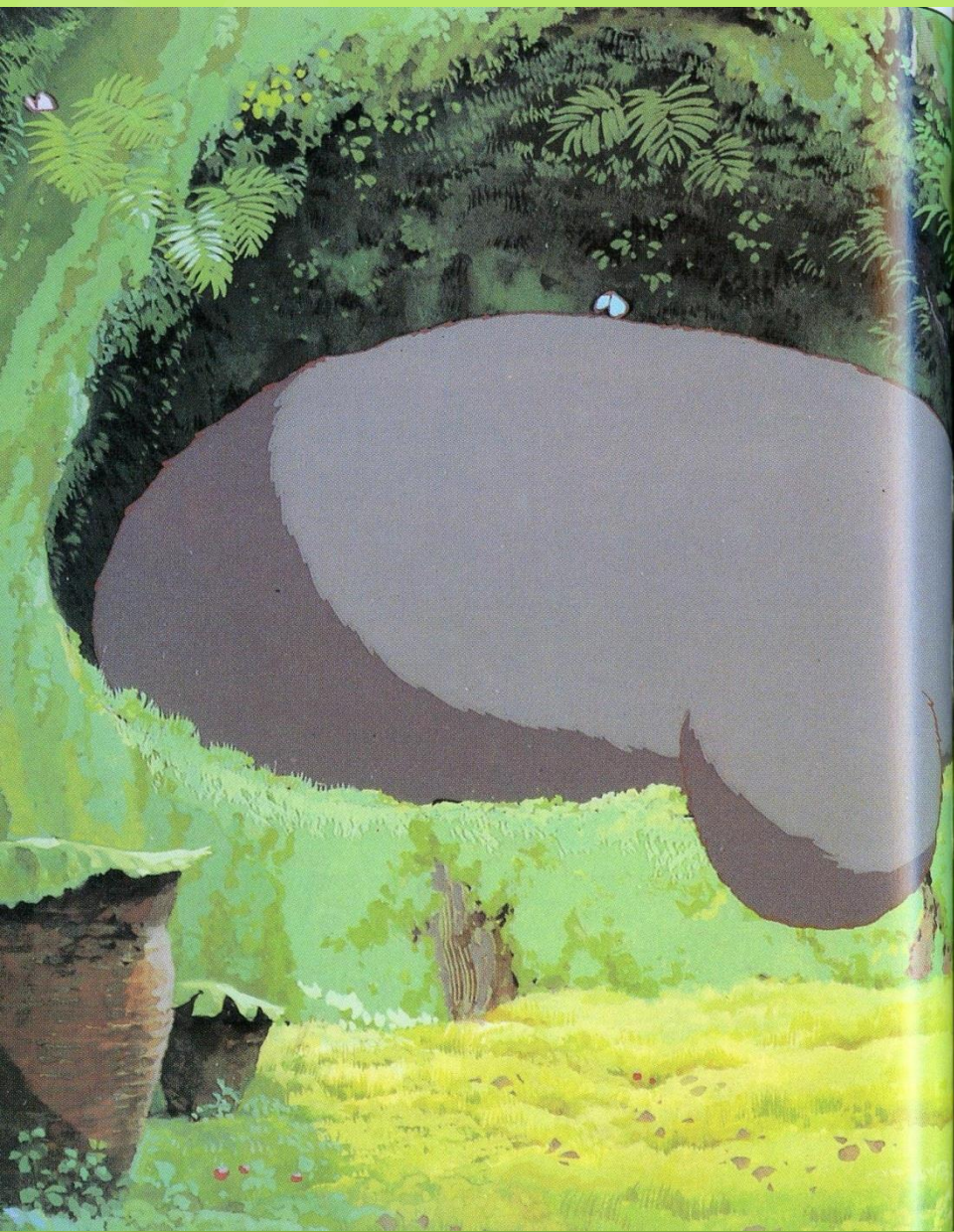
「大地有情同時成道」(『正法眼蔵』「行持上」)

長白山(中国側から)・白頭山(北朝鮮側から)天池





わたしにとっての至高の「楽園」



みどい・いのち・たのしさ・よろこび



宗教と楽園

1, 楽園

2, 聖地

3, 他界～天国・浄土⇔地獄

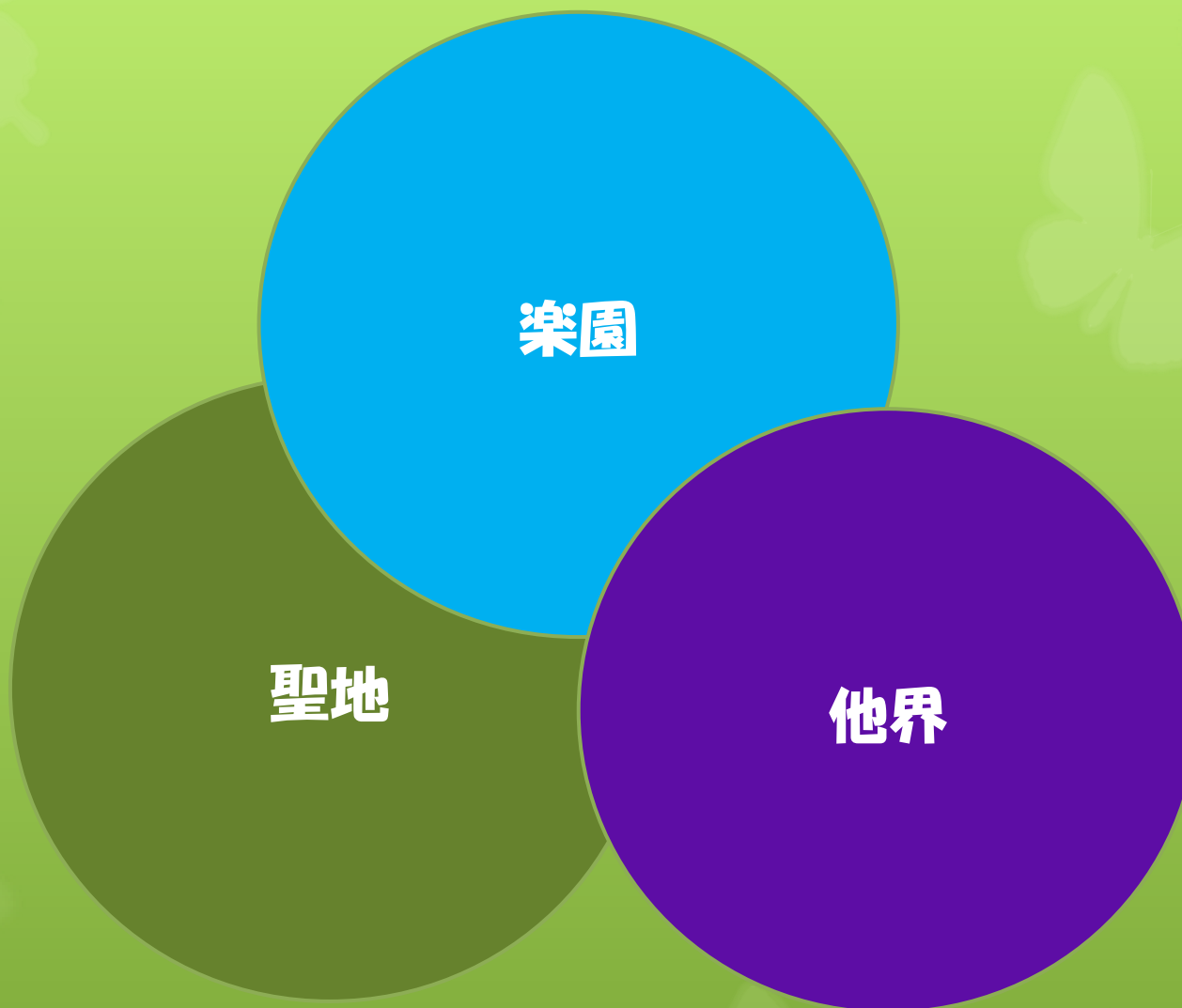
西方極楽浄土 阿弥陀如来

東方瑠璃光浄土 薬師如来～東方楽土としての常世・妣国・常若の国(ティルナノーグ)

南方補陀落浄土 観音菩薩～補陀落渡海(那智浜から)

密厳浄土(真言密教、密厳国・密厳仏国・三密で荘厳された国土)

★ 四神相応の地～風水(楽園化の呪術)



1, 樂園 2, 聖地 3, 他界関連図

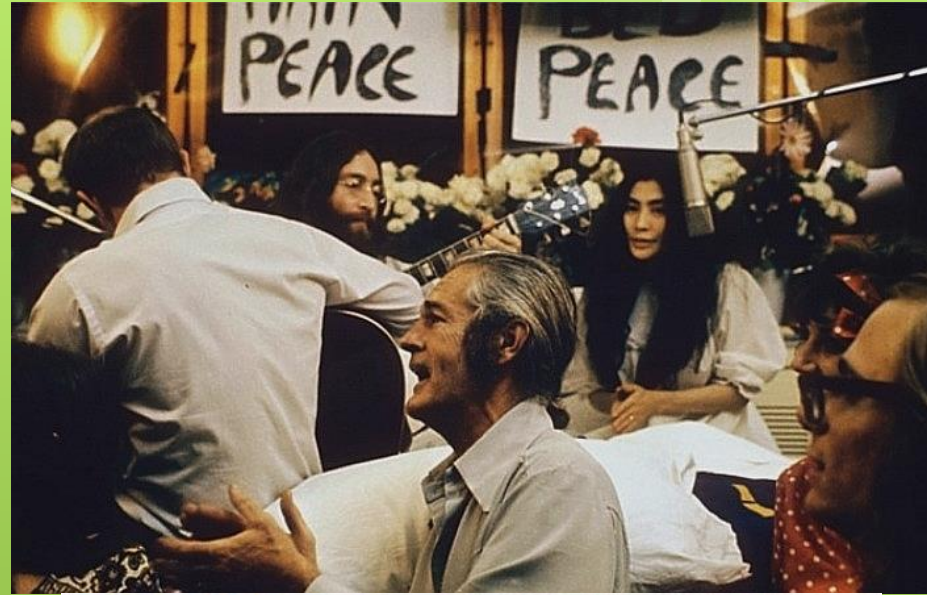
楽園社会実装運動の宗教史的事例

「地上天国」「千年王国」「寂光浄土」運動

- 1, 出口なおと出口王仁三郎による「地上天国」運動
- 2, キリスト教の千年王国運動
- 3, 日蓮の「寂光浄土」思想～地上の法華経楽園化運動

ティモシー・フランシス・リアリー (Timothy Francis Leary, 1920-1996)

- サイケデリック療法
- 加藤清(とてもラジカルな統合失調症研究の第一人者で、LSDが非合法化される前に、京都大学医学部助教授時代に独自のサイケデリック療法を試みていた。)
- その加藤清先生とは、1991年に北京から承德に行くバスの中で初めて出会い、わたしの「脱魔」体験を、「deep ecological encounter」と言われた。
- その数年前の1987年頃だったか、NTT研究所の研究会で、ティモシー・リアリーに会った。
- 確か、意識の変容(変性意識状態)をテーマにした研究会であったと思う。



「至高の境地」に至る前に???

- しかし、サイケデリック療法がうまくいくかどうか、保証はない。
- それにより、より深刻な人格損壊に至るケースもあっただろう。
- ここでは、「楽園」を希求し、「至高の境地」に至ろうとする修行者が陥りやすい「偏差・魔境」の問題を再度取り上げたい。
- その際、2019年3月に発表した論文「身心変容技法と霊的暴力～大本事件とオウム真理教事件を中心として」の再考から始めたい。

国際シンポジウム 身心変容のワザと哲学 2018年12月1日(土)



「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとって望ましいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる知と諸技法」を指します。音楽・宗教・芸術・芸能・武道・スポーツ・教育などの諸領域で様々な身心変容技法が編み出されてきました。たとえば、折り・祭り・元服・洗札・灌頂などの伝統的宗教儀式、瞑想・イニエーション・武術・体育などの修行やスポーツのトレーニング、歌・音・舞踊などの芸術や芸能・治療セラピー・ケア、諸種の教育プログラムなどです。

今回の国際シンポジウムは、これまでの「身心変容技法」研究の一つの結晶・総括・区切りとして企画しました。本研究会ですでに何度か発表してもらった理論家・実践家を招いて、現象学的身体哲学、現代演劇、中国伝統技法、サーカス、能と修験道などを取り上げながら、「身心変容技法」の本質と構造と特性と諸相について、議論を深めたいと思います。関心がありましたら、ぜひご参加ください。

身心変容技法研究会代表：鎌田東二

*無料・予約不要(直接会場にお入りください)



基調講演

ベルナルド・アンドリュウ(パリ第5大学教授・身体哲学、フランス)「フランス身体論からみた身心変容の哲学」
レオニード・アニシモフ(演出家・ロシア功労芸術家、ロシア)「演劇における身心変容技法」
張明亮(気功家・峨眉丹道医薬養生学派第14代伝人・日本峨眉養生文化研修院院長、中国)「五臓の首符と身心変容技法」
奥井遼(同志社大学社会学部教育学文化学助教授・臨床教育学・身体哲学)「サーカスと身心変容技法」
鎌田東二(上智大学グリーンケア研究所特任教授・身心変容技法研究会研究代表者)「能と修験道における身心変容技法」
コメンテーター：アレクサンドル・ルジャンドル(パリ第5大学博士)
通訳(逐語通訳)：フランス語・ロシア語・中国語 *なお、各講演終了後、講演者全員参加で総合討論を行います。



日時：2018年12月1日(土) 13時～18時
場所：上智大学四谷キャンパス(6号館101教室
(ソフィアホール、800名収容)

主催：上智大学・科研：身心変容技法研究会
連絡先：wazasophia@gmail.com



研究会 11月30日・第一日目/12月2日・第三日目

一般公開国際シンポジウム 12月1日・第二日目

第一日目 11月30日(金) 研究会(要予約登録)

13:00-17:00

場所：上智大学四谷キャンパス L号館(中央図書館8階)821会議室
内容：招待講演者の紹介 講義

テーマ：身心変容の哲学～現象学的身体論を越えて

発表者：ベルナルド・アンドリュウ(パリ第5大学教授)

質疑応答・総合討論：鎌田東二 レオニード・アニシモフ 張明亮 アレクサンドル・ルジャンドル 奥井遼ほか

第二日目 12月1日(土) 一般公開国際シンポジウム(予約不要)

13:00-18:00

場所：上智大学四谷キャンパス 6号館101教室(ソフィアホール)
内容：公開国際シンポジウム・基礎講演

テーマ：身心変容技法の可能性と限界

講演者：ベルナルド・アンドリュウ レオニード・アニシモフ

張明亮 奥井遼 鎌田東二

コメンテーター：アレクサンドル・ルジャンドル

第三日目 12月2日(日) 研究会(要予約登録)

13:00-18:00

場所：上智大学四谷キャンパス L号館(中央図書館9階)911会議室
内容：講義+ワークショップ

テーマ：演劇的身体と気功的身体の哲学とワザ

レオニード・アニシモフ(演出家・ロシア功労芸術家、ロシア)「演劇的身心変容のワザ」

張明亮(気功家・峨眉丹道医薬養生学派伝人・日本峨眉養生文化研修院院長)「五臓の首符と身心変容技法」

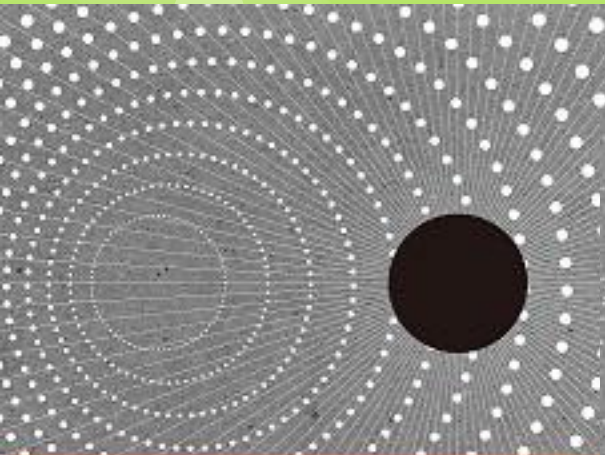
質疑応答・総合討論：鎌田東二 ベルナルド・アンドリュウ アレクサンドル・ルジャンドル 奥井遼ほか



* 予約登録アドレス wazasophia@gmail.com

身心変容技法研究シリーズ全3巻

2021年3月完結



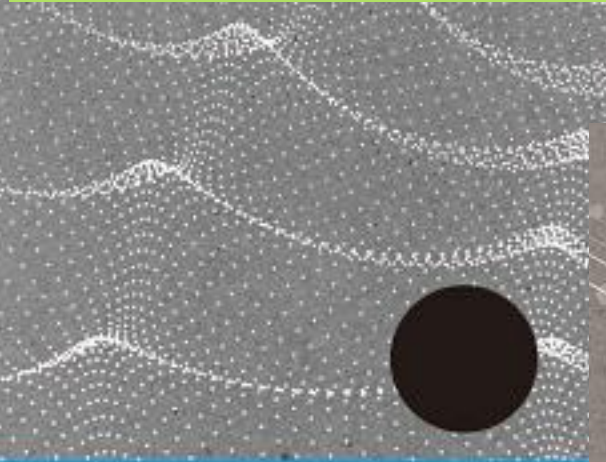
身心変容技法シリーズ①

身心変容の科学～瞑想の科学

マインドフルネスの最新科学から、実践する身体知まで、瞑想を科学する読み

永沢 哲	井上ウィマラ	安本 義正
齋木 潤	河合 俊雄	内田 樹
藤野 正寛	長谷川 千祐	町田 宗風
乾敏 郎	榎次 正和	
林 紀行	加藤 雅裕	

【編】 鎌田東二



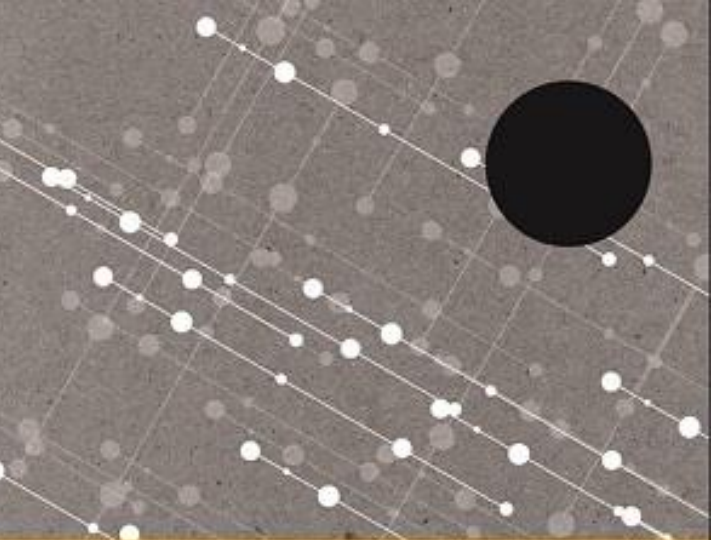
身心変容技法シリーズ②

身心変容のワザ～技法と伝承

マインドフルネスの最新科学から、実践する身体知まで、瞑想を科学する読み

内田 樹	セルゲイ・ヤーツン	長橋 節量
奥井 遼	鶴岡 晋雄	レオニード・アニシモフ
鎌田 東二	永沢 哲	
鎌田 賢哉	中島 啓博	
鎌田 賢哉	松岡 心平	
松野 祐	松崎 健	

【編】 鎌田東二



身心変容技法シリーズ③

身心変容と医療／表現～近代と伝統

先端科学と古代シャーマニズムを結ぶ身体と心の全体性

熊野 宏昭	齋 明亮	柿沼 敏江	奥井 遼	木村 はるみ
林 紀行	河合 俊雄	藤枝 守	小西 賢吾	加藤 之晴
井上ウィマラ	阪上 正巳	高橋 悟	金 香津	島 蘭 速
稲葉 俊郎	野村 理朗	松崎 健	アルタンジョラー	
清田 覚	松田 和郎	今福 龍太		
藤守 創	古谷 寛治	安田 登		
中田 英之	町田 宗風	西平 直		

【編】 鎌田東二



序章

身心変容と生業と医療～なりわい・わざわい・さちわいの交叉点

序章——医療と身心変容技法の原点と展開

鎌田東二

京都大学名誉教授、上智大学グリーンケア研究所特任教授
研究代表者

はじめに

本書は、これまで二冊刊行した「身心変容技法シリーズ」の第3巻で、最終巻となるものである。

同シリーズは、第1巻として、「身心変容の科学／瞑想の科学 マインドフルネスの脳科学から、共鳴する身体知まで、瞑想を科学する試み」と題し、二十二本の論文とシンポジウム記録を収録したA5版四四〇頁二段組の大著で二〇一七年一〇月に刊行した。続いて、第2巻として、「身心変容のワザ／技法と伝承 身体と心の状態を変容させる技法と伝承の諸相」十八本の論文と六つの講演とディスカッションを含む国際シンポジウムの全記録を、同じくほぼ同様の分量の大著で二〇一八年三月に出版した。

それに続く最終巻が本巻「身心変容と医療／表現」で、これまでの二巻を大幅に超えるA5版二段組み六〇〇頁余

もの大大著となった。三十人の執筆者の三十二本の論文と講演録を収めている。医療やケアや身体に関わる総合的な視点と多様な事例を含む本書は、COVID-19、新型コロナウイルスの感染拡大で苦しんできた現代世界の医療やケアに対して重要で多彩なヒントをもたらすことができると確信している。

本巻を含む全三巻の狙いと内容と特色を簡潔に振り返っておくと、まず、瞑想をよりフィジカルでエビデンス・ベースドな視点から解明し、位置付けようとしたのが第一巻の狙いであった。それまで、瞑想などにどのような効果があるのか、半信半疑ながらも、その伝統が何千年もの間続いてきたことには意味があると思っていた人たちに、最新の科学的な成果、特に認知心理学や神経科学の分野からの知見は確信と希望を与えることができたと思う。実際、二〇〇〇年代に入り、脳科学的な研究が進展するにしたがって、生活や教育プログラムの中に瞑想を取り入れる人た

ちが増えてきたことは事実で、各種メディアも大きく取り上げることになり、その方面の出版物も格段に増えた。そのような流れもあって、第1巻「身心変容の科学―瞑想の科学」も一定の注目を浴びることになった。

続いて、第2巻「身心変容のワザ―技法と伝承」は、「身心変容」および「身心変容技法」の技法と思想の核心に迫るもので、本シリーズの白眉を成す論考群であったといえる。あらゆる宗教は人間の身心を「変容」させる力と技術を内包している。瞑想や観想然り。音楽、舞踊、演劇、絵画、建築などの宗教に関わる芸術・芸能然り。そうした各宗教文化における「身心変容」と「身心変容技法」について、多彩で広角的なアプローチで迫ったのが第2巻である。

そもそも、身心変容技法とは、「身体と心の状態を当事者にとって望ましいと考えられる理想的な状態に切り替え、変容・転換させる知と技法」で、古来、宗教・芸術・芸能・武道・スポーツ・教育などの諸領域でさまざまな身心変容技法が編み出された。折り・祭り・元服・洗礼・灌頂などの伝統的宗教儀礼、瞑想・イニシエーションや武道・武術・体術などの修行やスポーツのトレーニング、歌・合唱・舞踊などの芸術や芸能、治療・セラピー・ケア、諸種の教育プログラムなどが含まれる。それら身心変容技法の

この「身心変容技法シリーズ」全三巻は、科研「身心変容技法の比較宗教学―心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」(科研基盤研究A、二〇一一年度―二〇一四年度)と「身心変容技法と霊的暴力―宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」(科研基盤研究A、二〇一五年度―二〇一八年度)の研究成果に負うている。本序章と終章の島蘭進論文「医療の現場におけるスピリチュアルケア・グリーフケアと臨床宗教師の活動―現代死生学の探究」を除いてすべて、身心変容技法研究会の年報「身心変容技法研究」(全8号、京都大学こころの未来研究センター&上智大学グリーフケア研究所刊)に掲載したものである。これまで、約八〇回近く開催した身心変容技法研究会(<http://waza-sophia.la.cocacn.jp/>)の八年間の科研研究の期間が終わっても、今なお続いている研究会の面々に心からの敬意と謝意を捧げたい。

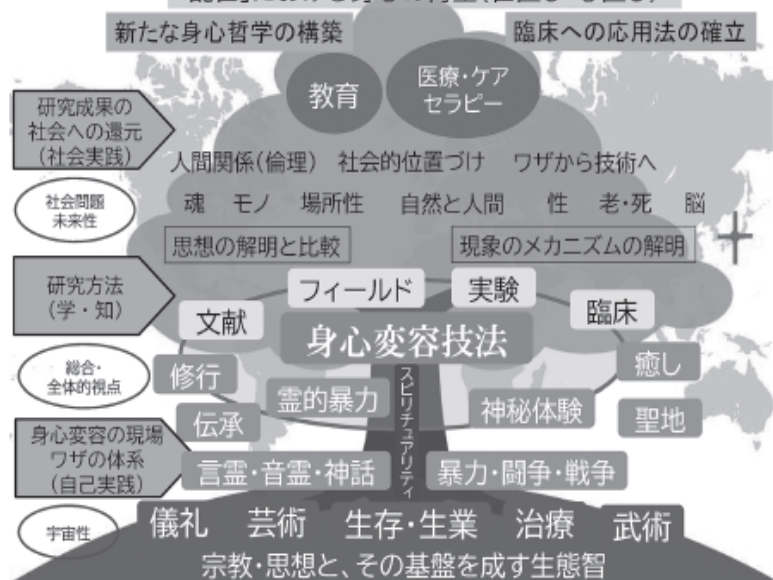
本序章では、全三巻を見通す身心変容技法の発生と展開と医療との関わりを、大変迂遠にも見える人類史的な観点をもって概観し、全体の導入部としたい。議論は大きく、多岐に及ぶが、「身心変容と医療/表現」の総説として読んでいただけると幸いである。

多くは、師から弟子へと伝授され、追体験と吟味を重ねながら伝承されてきた。人類史は、そうした身心変容技法の継承史とイノベーションの積み重ねである。

第2巻では、そうした諸身心変容技法を、キリスト教神秘主義の身心変容、太極拳の体験的考察、修験道のフィールド研究、仏教の身心変容技法、イスラーム神秘主義(スーフィズム)、荘子、湯浅泰雄、舞台芸術における身心変容―世阿弥とスタニスラフスキーなどを論じている。身心変容技法の具体的な事例と思想に焦点を当てた、全三巻中でもっとも「身心変容技法」の内実に迫った一巻であるといえよう。

それら前二巻に対して、本巻である第3巻「身心変容と医療/表現」は、新型コロナウイルスの感染拡大で苦しんでいるさなか、医療や癒しや臨床にかかわるさまざまなヒントを含む応用事例的な一巻である。第1巻の瞑想の科学的な側面と、第2巻の豊富な身心変容技法の事例研究の側面との両方を含み、その両者を臨床的に統合・総合しようとして企図している。本書を通して、医療といういとなみの根源にあるものやその広がりや構造、また生きる力の源泉にひそむものについて目を凝らし、生の指針を得ていただければ幸いである。

「乱世」における身心の再生(世直し・心直し)



身心変容技法研究の概念図

「身心変容技法」はいかにして生まれてきたのか？

～生命進化と生存戦略の方策と試行

- ①「なりわい(生業)」の要請
 - ②「わざわい(災禍)」の発生と鎮静の試み
 - ③「さちわい(幸福)」の希求と実現にむけて
- 「なりわい・わざわい・さちわい」
の交叉点で生起する

生存戦略としての身心変容技法

身心変容技法研究概念図 鎌田東二+小西賢吾+鶴岡賀雄+津城寛文他作成

「乱世」における身心の再生(世直し・心直し)

社会への還元
(社会実践)

社会現実
未来性

新たな身心哲学の構築臨床への応用法の確立

教育 医療・ケア
セラピー

人間関係(倫理)

ワザから技術へ

社会的な位置づけ

自然と人間

研究成果

魂モノ

場所性(聖地・霊場)

老・死 性 脳

思想の解明と比較

現象のメカニズムの解明



研究方法
(学・知)

文献

フィールド

実験

臨床

総合・全体的視点

身心変容技法

身心変容の場
(自己実践)

霊的暴力

聖地

修行

伝承

神秘体験

癒し

スピリチュアリティ

言霊・音霊・神話

暴力・闘争・戦争

ワザの体系

儀礼

芸術

生存・生業

治療

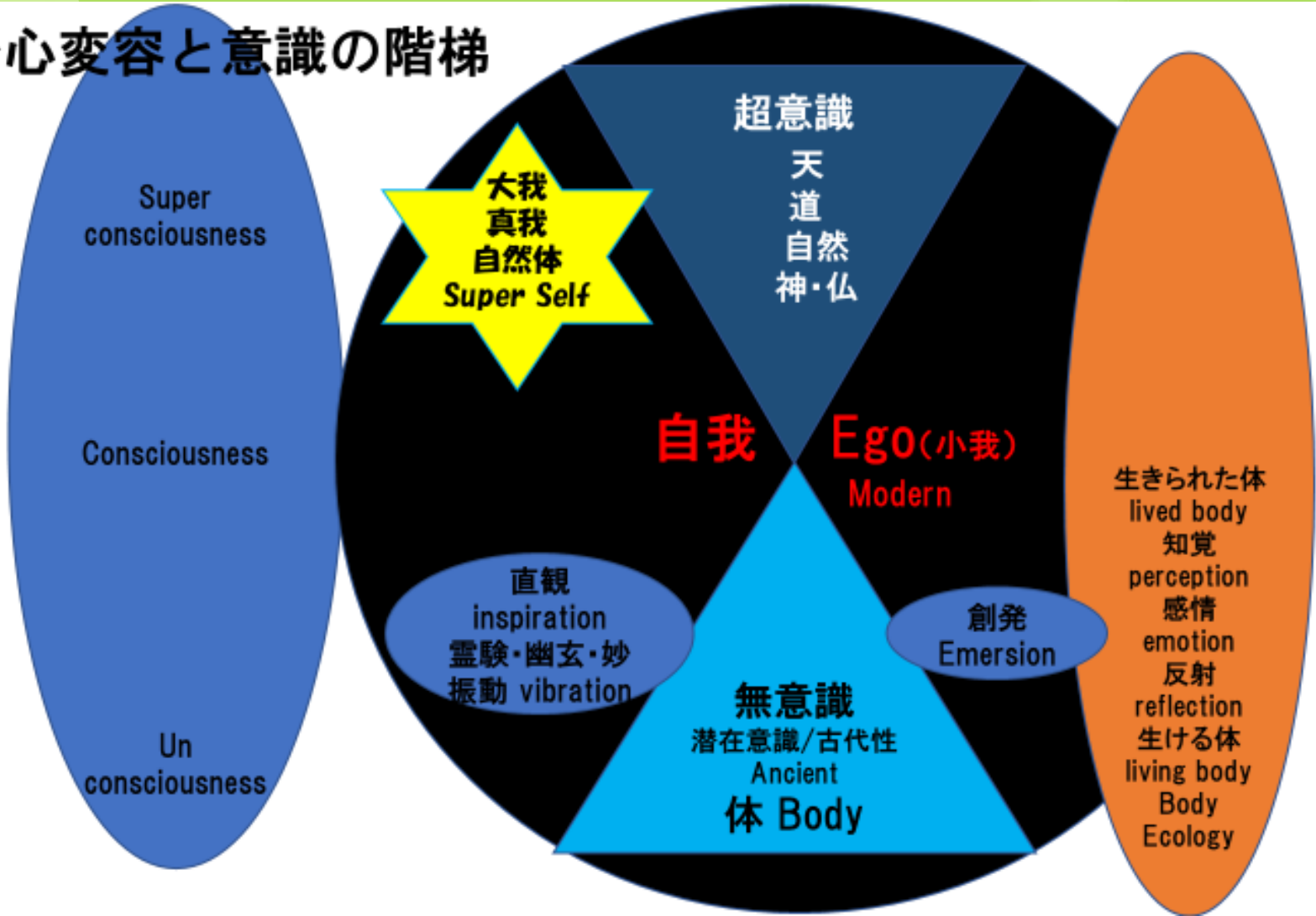
武術

宇宙性

宗教・思想と、その基盤を成す生態智

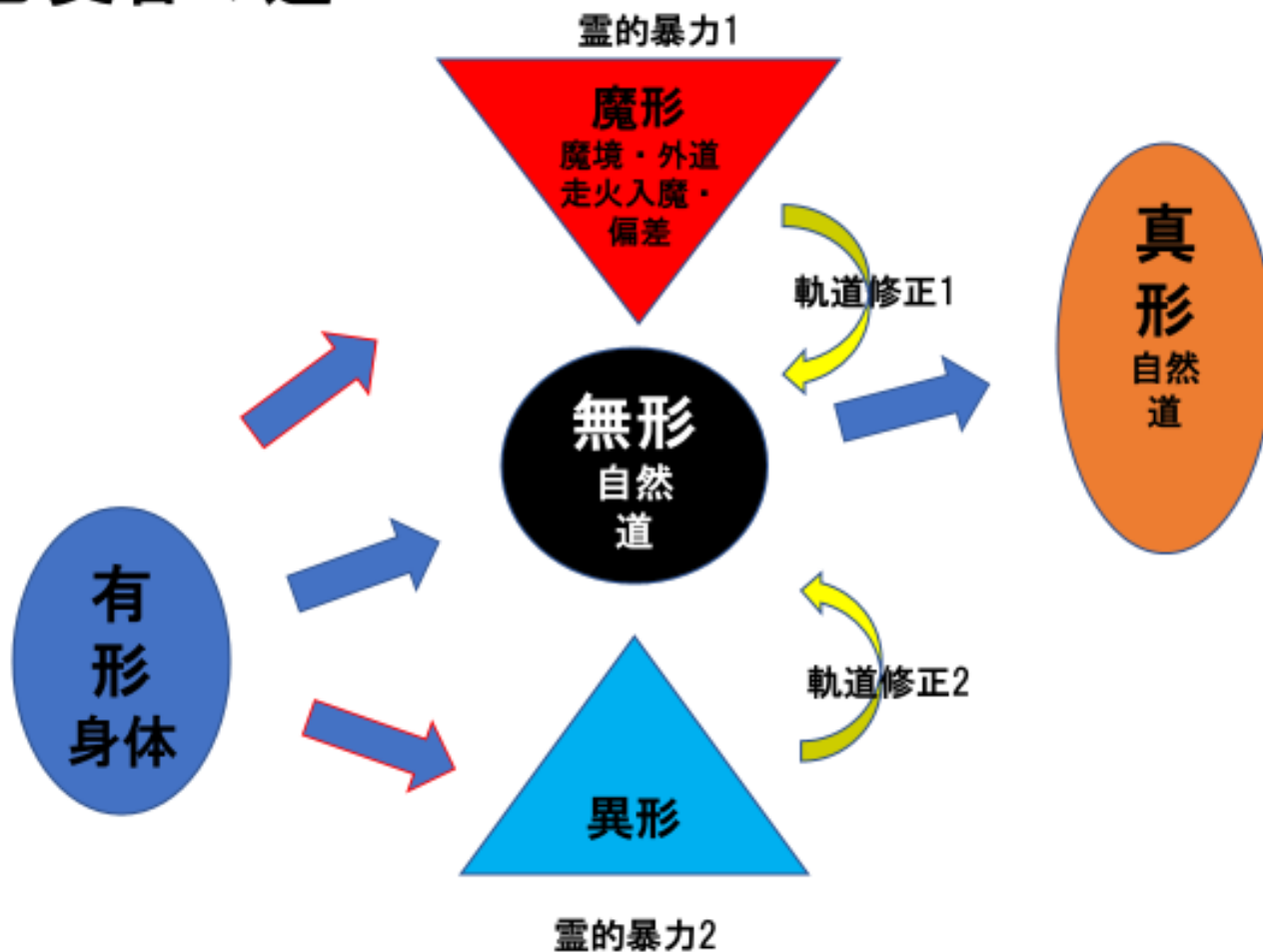
「至高の境地」とは？

身心変容と意識の階梯



「身心変容技法と霊的暴力～大本事件とオウム真理教事件を中心として」 (『身心変容技法研究』第8号、2019年3月刊)

身心変容の道



- パリ第5大学博士のアレクサンドル・ルジャンドルは、2018年11月30日に行われた身心変容技法研究会国際シンポジウムにおいて、中国の太極拳の習得過程を分析しつつ、修行者はまず太極拳の「有形」修練を積み、そこから一度「無形」に解放されて、究極的に「真形」に辿り着くという修行の深化過程を図式化した(本誌国際シンポジウム記録279頁下段参照)。
- そこで私は、彼の図式の提示を受けて、その修行過程で「魔形」や「異形」に反れていくことがあると指摘し、その負の過程を含む全体構造を示した(図1。以下に示したものは、その時のスライドにさらに加筆したものである)。それは、オウム真理教事件や破壊的カルトで発現する「霊的暴力」の発現を想定した図式で、修行による「超能力＝神通力」などの獲得が「霊的暴力」の行使にすり替わっていく過程を示したものである。
- つまり、ある型を学び(有形修行)、それに対する過剰な執着や自慢から解放され(無形境地)、そして終に寄り理想的な身心変容の境地(真形段階)に至るといふ身心変容技法の成功事例を基本モデルとした場合、「無形境地」に至るところか、よりの層支配力や慢心や競争心が高まり、他者に対する攻撃心が激化することも起こりえる。そうした方向を「魔形」(霊的暴力1)とする。だが、その逆に、修行がうまく行かず、「地獄に落ちてしまう」などと恐れを抱いてノイローゼになったり、過剰に自己卑下するようになったり、自己肯定感が根こそぎ失われるような事態に陥ってしまう。そのマイナスネガティブケースを「異形」(霊的暴力2)と措定し、有形修行の失敗にも二つのコースがあることを示している。

○ このモデル化を通して、「霊的暴力」が修行者の内部で生起する過程と場面を構造的に浮き彫りにする。修行者の内部で生起する問題はやがて外化される。あるいは、内部も外部との関係性によって「身心変容」が揺らぎ、変形し、誘導される。例えば、オウム真理教事件を引き起こしたオウム真理教教団においては、グルの絶対権力と絶対支配があったとはいえ、そのグルの絶対権力の支配は弟子の存在なしには行使し得ない。つまり、グルの命令を絶対のものとして受け入れ実施する弟子集団が存在して初めてその影響力は行使され、現実化する。もし弟子が一人もいない場合、グルの命令は現実化する社会的効力を持ち得ない。

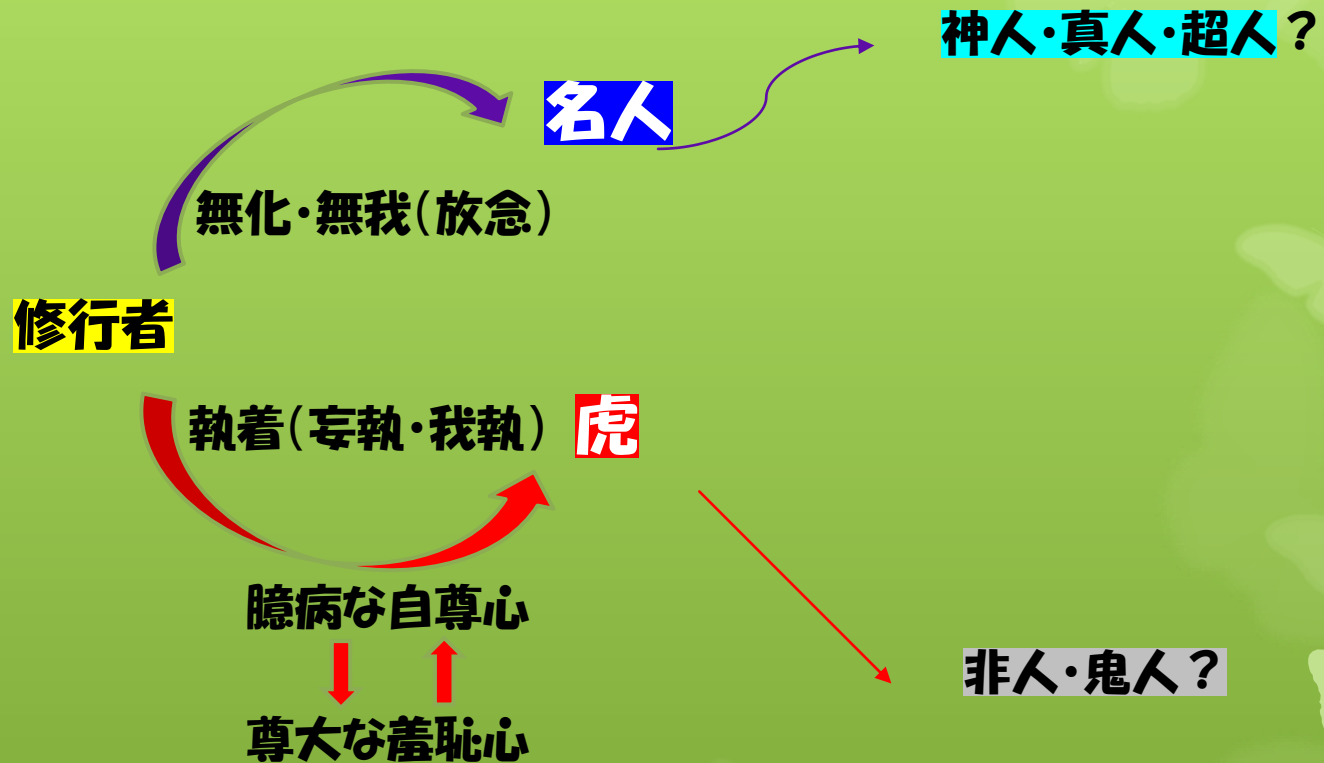
○ オウム真理教の場合に当てはめてみると、「グル」とか「尊師」と呼ばれて絶対的な権威と権力を行使した麻原彰晃(本名・松本智津夫)は、ヨーガや仏教(特に密教)の「有形」修行の過程で、禅で言う「魔境」(図1では「魔形」の一つに入る)に入った。拙著『呪殺・魔境論』(集英社、2004年)などで指摘したように、麻原自身はそのような「魔境」の存在や危険性を初期から認識していたが、自分の境地を「最終解脱者」と言い始めたところから本格的な「魔形」に入り、魔形的身心変容を遂げていった。そして、グルの「コピー」や「クローン」として弟子を改造しようとした段階から、弟子もまた「魔形」化していき、終に一連の「ポア」という名の殺人を行なったオウム真理教事件を引き起こすことになった。そして、そのような一種の自我肥大化や自我インフレーション的な怪物的「魔形」に行き着くこともなく、また、真の解脱過程ないし「無形—真形」の過程を辿ることもなく、諸種のダメージやトラウマを受けて挫折したり精神的に病んでしまった人たちもいる。そのような負のもう一つの過程を「異形」と位置づける。

○ ここで問題は、そのような「魔形」や「異形」の過程から、そこを抜け出て、「初心」や「発心」に立ち返り、軌道修正して「無形」や「真形」の道を辿り直すことができるかどうかにある。

「名人と虎のあいだ」

- 今日は、これを別の観点から考えてみます。
- 「名人と虎のあいだ」という観点から。

名人と虎のあいだ ~ 中島敦『名人伝』と『山月記』



修行者の身心変容

鎌田東二『靈的暴力と宗教の力動—オウム真理教事件と文学的想像力』(国書刊行会、2022年3月刊予定)

- 33歳で夭折した小説家中島敦(1909-1942)に、『名人伝』と『山月記』というよく知られた短編小説がある。中島敦の代表作ということもあって、両作品ともさまざまな観点から作品研究がなされているが、ここでは「身心変法技法」という観点からこの二つの小説が内在させている問題を考えてみたい。
- まず第1に、いかにして「名人」に成れるのかという問題。そして、そもそも「名人」とは何か、どのような境地や状態や人物を言うのか、という問題である。これを『名人伝』を通して考えてみる。
- 第2に、「名人」に成れなかった人はどうなるのかという問題だ。つまり、その修行に失敗し、挫折して、人生を棒に振った人間の問題である。実はこの問題が『山月記』に示されている。
- そこで、本書『靈的暴力と宗教の力動—オウム真理教事件と文学的想像力』のテーマを開いていくきっかけとして、この2つの作品を考察してみることから始めたい。

『名人伝』には、弓の名人となった紀昌の修行(作品中には「修業」と表記)のありさまとその晩年のありようが描かれている。紀昌は、趙の都の邯鄲に住んでいるが「天下一の弓の名人」になりたいと思い、弓の名手である飛衛に入門した。そして、5年あまり厳しい修行を積み、「奥儀秘伝」を会得した。

しかし、それに飽き足らなかった紀昌はさらなる求道をつづけ、西域の霍山に隠棲する甘蠅(かんよう)を訪ねて、9年間、矢を撃つことなく鳥を射落とす「不射の射」を学ぶ。

そして、邯鄲に戻ってくるのだが、その時、紀昌は愚者のような容貌になっていた。しかし、飛衛を含め、邯鄲の人々は紀昌を「天下一の名人」と絶賛する。「不射の射」を学んだ紀昌は「至射は射ることなし」と言い、「弓をとらない弓の名人」の名声は高まった。こうして、その後、とうとう紀昌は弓を手にもすることもなく、終には弓の名さえも忘れ果ててしまったという。

あらすじは以上のとおりだが、この紀昌が行なった修行は次のようなものであった。

①まったく瞬きしない修行。妻の機織台の下に潜り込んで、眼とすれすれに機織りの針(機躡(まねき))が上下するのを二年間も凝視しつづる修行をした。すると、二年後、鋭利な錐の先で瞼(まぶた)を突かれても、火の粉が目に飛び入っても、目の前に突然灰神楽が立っても、けっして目をパチつかせないようになった。「彼の瞼は最早それを閉ぢるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡してある時でも、紀昌の目はクワツと大きく見開かれた儘である」という状態に至ったのである。

2つの修行と「不射の射」の修行の質的違い

②次に、「小を視ること大の如く、微を見ること著の如く」なるまで、視ることを学ぶ修行をした。虱(しらみ)を3年間見つめつづけ、馬のような大きさに見えるようになった。家の外に出てみると、「人は高塔であつた。馬は山であつた。豚は丘の如く、鶏は城楼と見えた。雀躍して家にとつて返した紀昌は、再び窓際の虱に立向ひ、燕角の弧(ゆみ)に朔蓬の鞞(やがら)をつがへて之を射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、しかも虱を繋いだ毛さへ断れぬ。紀昌は早速師の許に赴いて之を報ずる。飛衛は高踏して胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。さうして、直ちに射術の奥儀秘伝を剩す所なく紀昌に授け始めた。

この2つの修行が一定の成果をもたらし、紀昌に超人的な視力を与えた。シラミが馬ほどの大きさに見える。たとえばであるが、人間が東京タワーのような大きさに見える。馬が富士山のように見える。豚が甘樫丘のように見える。このような次第なのだ。

あらゆるものがこのような大きさで見えたとしたら、弓矢を以て的を射ようとすれば、その的も浅間山か筑波山かくらいに見えたりするわけだから、外すということはない。百発百中になる。そこで、師匠の飛衛は弓術(射術)の免許皆伝、つまり「奥儀秘伝」をすべて伝えたのである。

だが、問題はそこから先である。紀昌は天下一の名人になるためには、師匠を超えねばならぬと思い、飛衛と対決する。が、勝負はつかなかった。この時、師匠の飛衛は弟子の行く先に危険を感じ、紀昌を霍山の頂ににいるという甘蠅老師の元へと送った。「一番になる」と「名人になる」とは大きな違いがある。そこには質的転換がある。

だが、苦勞して甘蠅老師の元に行くと、老師は百歳を超えており、腰が曲がり、「白髯は歩く時も地に曳きずつてゐる」ような「爺さん」であった。これでは誰だって大丈夫か？ と心配になるだろう。

ところが、この「爺さん」が超絶のワザを持っていた。甘蠅が「見えざる矢を無形の弓につがへ、満月の如くに引絞つてひようと放」つと、「鳶は羽ばたきもせず中空から石の如くに落ちて来」たのだから。

紀昌は「慄然とし」て、この時「始めて芸道の深淵を覗き得た心地」がしたのだった。甘蠅は「不射の射」という不射の矢を放つたのだった。しかし、その不射の矢でなぜ鳶は中空から石のように落下したのか？ まさにそれは、「射」の競争による「一番」のワザではなく、「射」というワザのありようと概念を質的に転換した名人のワザであったのだ。

こうして、9年間、紀昌はこの甘蠅「爺さん」の元で修行し、そして、故郷の邯鄲に戻った。

その時、紀昌の「以前の負けず嫌ひな精悍な面魂は何處かに影をひそめ、何の表情も無い、木偶の如く愚者の如き容貌に変つて」いた。

それを見て「旧師」の飛衛は紀昌の「顔付を一見すると感嘆し」、「**之でこそ天下の名人だ**。我儕(われら)の如き、足下にも及ぶものでないと」言い放ったのだった。

紀昌は修行の結果、かつての師匠を乗り越えたのである。

このような次第で、都の人々はみな期待した。この「天下の名人」がどれほどの優れた技を見せてくれるかと。

しかし、いっこうにそのような気配はない。「**弓さへ絶えて手に取らうとしない**」のだ。その上、「山に入る時に携へて行つた楊幹麻筋の弓も何処かへ棄てて来た様子」だ。

そのことを訊ねると、紀昌は「懶げ」に「**至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし**」と言ったのだった。

邯鄲の都人士は、この「**至為・至言・至射**」という矛盾の塊のような超絶コンセプトの言説に納得し、「弓を執らざる弓の名人は彼等の誇」となり、紀昌の評判はますます高まったのだった。

そして、**空を飛ぶ雁でさえ、紀昌の家の上を避けて通る**ようになった。それほど彼の権威と実力は認められていたのだった。 → 他の動物の知

紀昌が都に邯鄲に戻って来て40年後、彼は静かに息を引き取った。その間、紀昌が弓矢や射のことを話題にしたことはなかった。亡くなる1、2年前のこと、ある家を訪ねた紀昌はその家に飾ってある弓矢をしげしげと見つめ、これは何か、何をやるものかと訊ねた。その家の主人はこの紀昌の言葉を訊いて驚愕し、叫んだ。「ああ、夫子が——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ ああ、弓といふ名も、その使ひ途も！」その後、邯鄲の都では、しばらくの間、「画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の絃を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥ぢたといふ」。

中島敦の『名人伝』はこのような弓矢の名人が弓矢の存在すらも忘却し果てた姿を描いて終わっている。これは、弓矢の射術の名人に成るための修行を完成したものと見ることができるだろうか？ とりあえず、この事態を修行の成就完成と見てみると、これは、老荘思想で説くすべてを忘れ果てる「坐忘」のような心境であるが、そこに一点も執着のない超越、超絶の境地に至って初めて名人の名人たる境地に達したと言えるという逆説的な無が示されている。修行の果てに修行自体の意味も過程(課程)も忘れ去り、すべてを放下し、超脱しているという境地境涯である。「至為・至言・至射」の世界を示す「不射の射」のワザの位相をひとまず、修行者の一つの極として位置づけてみる。

だが、このような修行の果ての「名人」の位相に対して、中島敦のもう一つのよく知られた『山月記』は、「詩人」になり損ねて「虎」になってしまったという非道に堕ちた悲話が描かれる。第一級の詩人になるために艱難辛苦の詩文修業の精進努力をしたはずであるが、李徴はなぜ詩の名手になれずに虎になってしまったのか？

弓の名人であろうが、詩の名人であろうが、道を究めるという点では同じ修行者の一面を持つ。『名人伝』はその修行の究極の成就を描き、至高の弓道の境地を示した。しかし、『山月記』では、その失敗の相を悲劇的に描く。

『名人伝』を描いた中島敦は、名人に成れなかった詩人・李徴の崩落と変貌を次のように描き始める。

隴西(ろうさい)の李徴は博学才穎(さいえい)、天寶の末年、若くして名を虎榜(こぼう)に連ね、ついで江南尉(こうなんい)に補せられたが、性、狷介(けんかい)、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。

いくばくもなく官を退いた後は、故山、魏略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃から其の容貌も峭刻(しょうこく)となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の倂は、何処に求めやうもない。数年の後、貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになつた。一方、之は、己の詩業に半ば絶望したためでもある。

曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつた其の連中の下命を拜さねばならぬことが、往年の雋才(しゅんさい)李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々(おうおう)として楽しまず、狂悖(きょうはい)の性は愈々(いよいよ)抑へ難くなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水(じょすい)のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変へて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつ其の儘下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。

李徴は知友との交わりも絶って、ひたすら詩作にふけて、詩人として後世に名を残そうとしたが、しかし、いっこうに文名は上がらず、生活は苦しくなるばかり。とうとう、食うために彼は節を曲げて地方官吏の職を得た。しかし、自分よりも能力に劣ると思っていた輩が自分の上司として命令に屈しなければならない。李徴の自尊心はいたく傷ついた。そして、「狂悖の性」を抑えがたくなり、ついに「発狂」し、わけのわからない叫び声を挙げて外に飛び出したまま、戻ってくることはなかった。いったい、李徴の身に何が起こったのだろうか？

汝水のほとりに泊ったある夜、一睡ののち夜中に目覚めた李徴は、戸外で誰かが自分を読んでいる声が聴こえたので、宿を飛び出し、その声の方に向かって走った。無我夢中で駆けているうちに、いつしか道が山林に入っていて、知らぬ間に自分の左右の手が地面をつかんで走っているのに気づいた。この時、何か身体中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた」のだった。

そして、気がつくやうに、手先やひじのあたりに毛が生えている。明るくなって、谷川に自分の姿を映して見たら、信じられないことに、もうすでに、虎に変わり果てていたのだった。「これは夢に違いない」と思ったが、しかし、それは夢ではなく、現実だった。「自分は茫然とし」て「深く懼(おそ)れ」、どうしてこんなことになってしまったのか考えたが、わからない。すぐに死のうと思ったが、眼の前を一匹のウサギが駆け過ぎていくのを見た途端、「自分の中の人間は忽ち姿を消し」て、ウサギに食らいついていたのだった。そして、「再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗(まみ)れ、あたりには兎の毛が散らばつてゐた」のに気づいた。

- それが「虎としての最初の経験」だった。今も、一日のうちに数時間ほど「人間の心」がもどってくる。そんな時には、「人語」も話もできれば、「複雑な思考」もできる。また、昔覚えた儒教の経書をそらんじることもしる。しかし、この人間に立ち返る時間が日に日に短くなってきた。これまでは、「どうして虎などになつたか」と怪しんでいた。
- だが、この間などは、「己はどうして以前、人間だつたのか」と考えていたのだった。まもなく、自分の中の「人間の心」は「獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了ふ」。
- こうして「己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のやうに途中で君と出会っても故人(とも)と認めることなく、君を裂き喰(くろ)うて何の悔も感じなくなるのだ。
- 「己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあわせになれる」と思うのだが、しかし、「己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じてゐる」のである。そして、それを、「どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐる」ことか。「己が人間だつた記憶のなくなる」、「この気持は誰にも分らない」だろう。「己と同じ身の上に成つた者でなければ」、けっしてわからないだろう。

かつての友の袁愴にそう言いつつも、李徴は次のような頼みごとをする。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでゐた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作る所の詩数百篇、固より、まだ世に行はれてをらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつてゐよう。所で、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。之を我が為に伝録して戴き度いのだ。何も、之に仍つて一人前の詩人面(づら)をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執著した所のものを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ。

詩人として名を成したい。名を残したい。だが、いつまで経ってもそうならない。それどころか、生活は苦しく、節を曲げて食い扶持を稼がなければならない。嗚呼、これまでの自分の努力はいったい何だったのだ。自分を支えてきた矜持は何だったのか？もはや、自分を自分たらしめていたものが、今では自分を壊しにやってくる。自分で自分を食い荒らす。

このあと、問題の「心」のありようが告白される。それは、彼の「自尊心」と「羞恥心」にあった。その自尊心はしかし「臆病な自尊心」であり、羞恥心は「尊大な羞恥心」であったと説明される。つまり、屈折した自尊心と羞恥心が李徴の身心を蝕んだということだ。

その複雑骨折したような「心」がついには李徴を強烈な自尊心を持つ詩人から獸身の虎に変えてしまったのだ。そのような<心狂い>の恐ろしさを『山月記』は絶妙の描写で描いている

袁愔は、李徴と同じ年に「進士」となった数少ない友人であった。温和な性格のためか、李徴とぶつかることもなく、親しく交わることができた。しかし、虎となった李徴は、山中を通りかかったかつての友人に襲いかかって食い殺そうとした。そのことに気づいた虎の李徴はしのび泣きをもらし、自分がなぜこのような身となったのかの理由を次のように告白する。

長くなるが重要な心情吐露の箇所であるので、その告白の全文を引用しておく。

何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党の秀才だつた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。己(おれ)は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己(おのれ)の珠(たま)に非ざることを惧(おそ)れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々(ろくろく)として瓦(かわら)に伍することも出来なかつた。己(おれ)は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚(ざんい)とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。

之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。今思へば、全く、己(おれ)は、己の有(も)つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。

人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだつたのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐるのだ。

虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる、己には最早人間としての生活は出来ない。たとへ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにした所で、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。

どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。

さういふ時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた。誰かに此の苦しみが分つて貰へないかと。

しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮(たけ)つてみるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つて呉れる者はない。

恰度(ちょうど)、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

この虎の悲しみ。虎と成った詩人の悲しみ。李徴の悲嘆。なぜこんなことになったのか？ なぜこんな「運命」になったのか？

それを虎と成った李徴は「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である」と自己分析している。「人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。」と自己洞察している。

これは道を行じていく修行者の戒めとして金言となる言葉である。どのような人にも一定の自己肯定感としての自尊心は必要である。しかしそれはほどほどでなければならない。その自尊心に素朴さや素直さが失われ、臆病さや嫉妬やそねみやうらやみが加わって屈折し「臆病な自尊心」となると、それは自己肯定感となるどころか、自己否定と自己破壊の錐となって心を切り裂く実にやっかいな刃物となる。

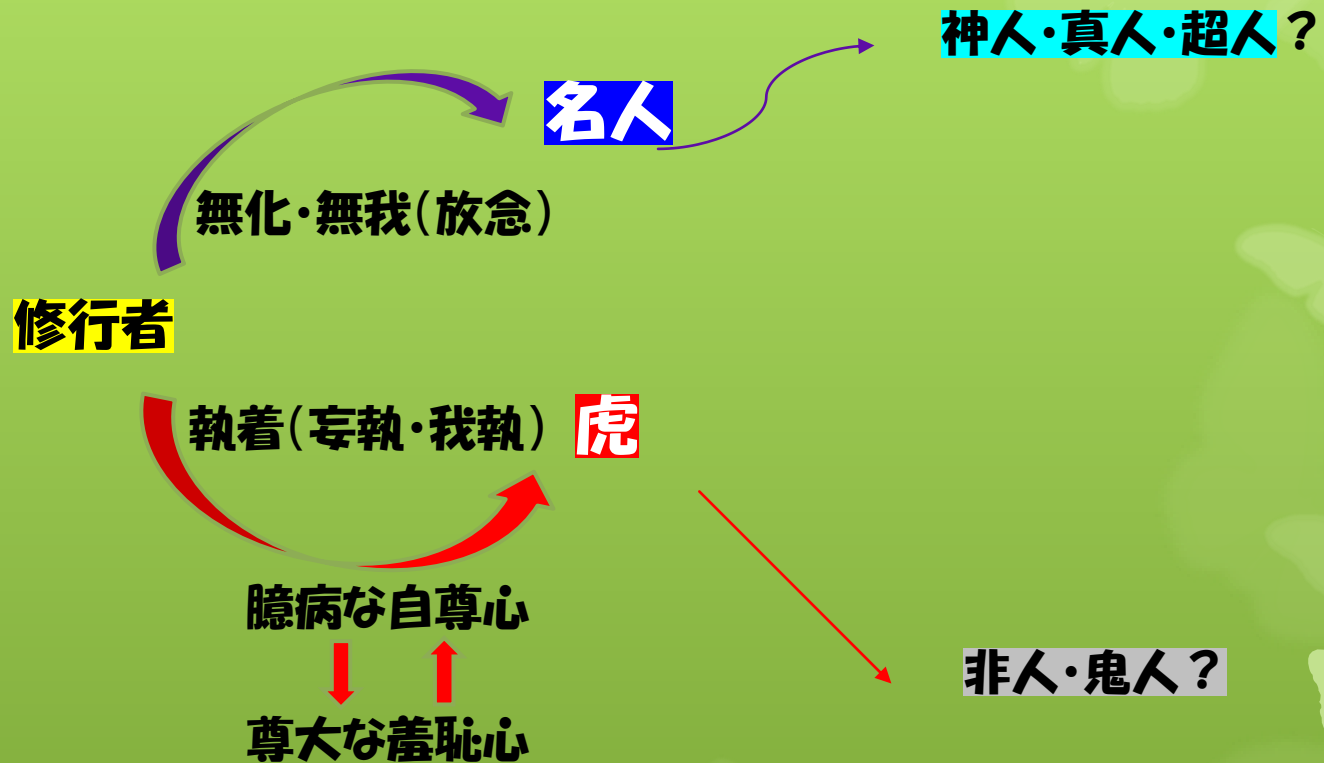
また、適度な自己抑制ができるためにも「羞恥心」も必要となる。それがあつたために、むやみな自己顕示や他者攻撃をしない抑制がはたらく。しかしそれが「尊大な羞恥心」となるとどうなるか。それは自他を破壊するほどの歪な負の反発力となって自己を蝕み、他者を妬み攻撃することになる。

「自尊心」も「羞恥心」も度を越したり、ねじ曲がったりすると手に負えないほどの破壊的な怪物となつて自他を食い破るのである。それが李徴を虎にした「心」である。

中島敦の『名人伝』と『山月記』は、このように2つの修行と対極的な「心」のありようを描いて、道を求める我々に多大な指標と教訓を示す。もちろん、これは小説として一流の作品であり、単なる道徳訓を垂れる説教集ではない。そうではないが、しかし、すぐれた作品は「心」の深層と真相を抉り出すことに貢献する。この両短編はそのような「心」を描いた名作である。そこから引き出される問題とメッセージは奥深いものがある。

この「名人」と「虎」とのあいだのディスタンスを図示すれば次のようになる。

名人と虎のあいだ ~ 中島敦『名人伝』と『山月記』



修行者の身心変容

- 本書で問題にする「霊的暴力」とは、自己をも他者をも食い破り、破壊する凄まじい力である。オウム真理教事件の首謀者である麻原彰晃(本名・松本智津夫)は、「名人」になろうとして「虎」になった修行者である。麻原は自分を「最終解脱者」、つまり「名人」と称したが、その実態は「名人」どころか「虎」であり、モンスターであり、悪鬼であった。その自分をモンスター化するのはたらきと力をまず何よりも問題としたい。そして、それを解毒していく道と想像力のありようを探りたい。本書の主題はそこにある。

目次

序章 名人と虎のあいだ

- 第一部 宗教と霊的暴力

第一章 身心変容技法と霊的暴力1～宗教経験における負の感情処理における総合的研究

第二章 身心変容技法と霊的暴力2～オウム真理教の身心変容技法

第三章 身心変容技法と霊的暴力3～大本教事件とオウム真理教事件を中心として

- 第二部 文学と暴力の境界

第一章 安部公房と三島由紀夫 第二章 三島由紀夫『英霊の聲』と霊学シャーマニズム

第三章 遠藤周作と石牟礼道子

第四章 石牟礼道子

第五章 石牟礼道子「花ふぶき生死のはては知らざりき」

終章 詩と霊性

「至高神」と「グノーシス主義」

- さて、ここで、もう一つ視点を変えて、この世界を反樂園と見て「至高神」の世界に立ち返ろうとした「グノーシス主義」について、考えてみたいと思います。
- ぜひ、このあたりのことは、キリスト教神秘主義の研究者である鶴岡賀雄さんに鋭い突込みを入れてほしいと思います。

グノーシス主義の定義(荒井献)

- 荒井献『新約聖書とグノーシス主義』(岩波書店、1986年)に所収の論文、『祭儀と認識』冒頭に記されている、グノーシス主義の普遍的概念。
- 「グノーシス」とは、古代末期の宗教史上に現われた若干の宗教グループとその教理大系のことであるが、それは次の**三つの特色**によって本質的に規定されている。
 - (一) **反宇宙的本質的二元論**
 - (二) **本来的自己と神性との本質的同一性の認識としての救済**
 - (三) **認識の啓示者、または救済者**

グノーシス主義の特徴

- グノーシス主義は既成の諸宗教思想の習合宗教。
 - ① ペルシアの宗教
 - ② ギリシアの宗教思想
 - ③ ユダヤ教・キリスト教
- グノーシスに固有な反宇宙的「現存在の姿勢」(Daseinshaltung)「精神の姿勢」(Geisteshaltung)。
- このようなグノーシス的姿勢が、諸宗教思想を素材として「存在の解釈」(Seinsdeutung)を現出し、これが必然的に超越的神性とそのもとから遣わされる救済者を要請して、人間はその「呼びかけ」により自己と神性との本質的同一性を認識し、この世から救済されることを知る。こうして、現存在の姿勢の対象化としての存在の解釈は、グノーシス的「創作神話」(Kunstmythos)を生み出す。

(荒井献『新約聖書とグノーシス主義』岩波書店、1986年、p. 268)

グノーシス主義

- **グノーシス主義**(英 Gnosticism)は、1世紀に生まれ、2-3世紀にかけて勢力を持った古代の神秘思想の一つであり、物質と霊の二元論に特徴がある。
- 「グノーシス」は認識、知識を意味するギリシア語に由来し、認識によって真の神に到達できるとした。
- 本来はキリスト教とは独立に成立した思想であったが、キリスト教徒の中にも影響を受けるグループがあり(キリスト教グノーシス主義、グノーシス派キリスト教)、創生当初のキリスト教の正統教会(カトリック教会)からは、最も危険な異端の一つと目されていた。また、
- 他の宗教とも融合し、ユダヤ教グノーシス主義(グノーシス派ユダヤ教)なども生み出した。

●グノーシス主義(古代キリスト教最大の異端宗派でカトリックから猛攻撃される)の異端性と現代的表現

- **特異な神観**(天地創造した神はデミウルゴス=ヤルダバオートで悪の神である。超越的な真の神は隠れている。原初の世界は至高神が想像したプレローマ界であったが、そこにおいて、アイオーンの神性の一つであったソフィアがデミウルゴス=ヤルダバオートを造り、この自らを唯一なる神と誤認した悪神・偽神デミウルゴス=ヤルダバオートこそ、悪の世界であるこの世界を造った『旧約聖書』の創造神ヤハウエーである。ちなみに、「ロゴス」は最後の最小のアイオンとされる。)
- **特異なキリスト観**(キリストとは「霊的人間」であり、グノーシス=霊的認識を獲得した存在である)
- **善悪二元論**(というより、善悪反転論)カイン派(ヘルマン・ヘッセ『デミアン』)・
- **認識的解脱志向性**(仏教の影響か?)本来的自己の至高神の元への帰還=救済。真の自己が真の神(至高神)の世界に帰還すること。
- カイン派(ヘルマン・ヘッセ『デミアン』)・ユダ派・マグダラの MARIA 派・アルビジオア派(カタリ派)
- 現代映画の中のグノーシス主義?『マトリックス』『ヘドウィク・アンド・アングリーインチ』『ダヴィンチ・コード』
- *インド思想や仏教は、イエスの修行や教えやキリスト教、グノーシス主義や新プラトン主義、ユダヤ教の密教のカバラ、イスラーム神秘主義のスーフィズムに深い影響を与えた。

「グノーシス主義的」を呼ばれ得るための必要条件

(『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』「グノーシス主義救済神話の類型区分」大貫隆、2-3頁、岩波書店、1997年)

- (1)人間の知力をもってしては把握できない至高神と現実の可視的・物質的世界との間には越え難い断絶が生じている。
- (2)人間の「霊」あるいは「魂」、すなわち「**本来的自己**」は元来その至高神と同質である。
- (3)しかし、その「**本来的自己**」はこの可視的・物質的世界の中に「**落下**」し、そこに捕縛されて、本来の在り処を忘却してしまっている。
- (4)その解放のためには、至高神が光の世界から派遣する啓示者、あるいはそれに機能的に等しい呼びかけが到来し、人間の「**自己**」を覚醒しなければならない。
- (5)やがて可視的・物質的世界が終末を迎えるときには、その中に分散している**神的な本質は至高神の領域へ回帰**してゆく、等々。

グノーシス主義の世界観

- グノーシス主義の創造神話。
- 天地を創造したエロヒムと真の神「善なる者」(至高神)は別のものである。始めに「至高神」があり、そこから多くの霊体が生まれた。
- 物質(自然、人間、宇宙)は「下等な神デミウルゴス」によって創造された(デミウルゴスはプラトン『ティマイオス』に由来する創造神)。
- 下等神によって創造されたこの世界は「悪」であり、人間の身体も実体として悪であるが、その中に「聖なる火」(プネウマ=聖霊。すなわち真の神から降りてきた善なるものであり、「本来の自己」)を含んでいる。選ばれた者は知識(グノーシス)によって、自己を至高神に復帰させることが出来る。
- キリスト教グノーシス主義では、『創世記』の神は「デミウルゴス」と考える。
- イエスは「至高神」の子で、人間に真理を啓示するため遣わされたとする。
- グノーシス主義者のほとんどは、肉体の楽しみは邪悪なものだという考えに立って、禁欲と苦しい修行とを实践したが、反社会的・享樂的な一派もあった。

- <私は最初の者にして最後の者。>
- 私は尊敬される者にして軽蔑される者。
- 私は娼婦にして崇敬される者。
- 私は妻にして処女。
- 私は<母>にして娘。
- 私は母の一部。
- 私は不妊にして多産。
- 私は婚宴数多くして非婚。
- 私は助産婦にして産み出さない者。
- 私は私の産みの苦しみを和らげる者。
- 私は花嫁にして花婿。
- そして、私を産んだのは父の夫。
- 私は私の父の母にして私の夫の姉妹。
- そして、彼は私の子孫。
- 私は私の子孫の支配者。

(中略)

- 私は知識にして無知。
- 私は控えめにして大胆。
- 私は恥知らずにして恥を知る。
- 私は強力にして、恐れ。
- 私は戦争にして、平和。

(中略)

- 私は私の探究の知識にして、
- 私を求める者たちの発見にして、
- 私に尋ねる者たちの命令にして、
- 私の知識の内なる諸力の力、
- 私の言葉によって遣わされた御使いたちの力、
- そして、私の計らいによる諸々の季節の中なる神々の力、
- そして、私と共にあるすべての男の霊の力、
- 私の内に住まう諸々の女の力。
- 私は敬われ、讃えられる者にして、軽蔑され、疎まれる者。
- 私は平和にして、私ゆえに戦争が起こる者。
- そして、私は外国人にして市民。
- 私は本質にして、本質を有しない者。
- 私と本質を共有する者は私を知る者。
- 私に近い者たちは私を知らなかった。
- そして、私から遠くにいる者たちは私を知った者。
- 私が[あなたたち]に近づく日に、[私は]あなたたちの[近くにいる。]

- 私は結合にして解消。
- 私は滞在にして解消。
- 私は下りにして、人々が私に上る。
- 私は有罪判決にして、無罪放免。
- 私はといえば、私は罪なき者にして、罪の根の出自。
- 私は外見欲望にして、心の節制わが内に。
- 私はすべての人に達する聴力にして、捉え得ない言葉。
- 私は話し得ない啞者にして、私の多弁は大なるもの。
- 私に優しく聴きなさい。そして私から厳しく学びなさい。
- 私は《大地に》叫ぶ者にして、大地に投げ出される者。
- 私はパンとく > 内にヌース(叡知)を備える者。
- 私は私の名の認識。
- 私は叫ぶ者にして、聴く者。

(中略)

- 私は「真理」と呼ばれる者にして〔私の名は〕暴力。

(中略)

- 私はあらゆるものに達する聴力。
- 私は捉え得ないコトバ。
- 私は声の名前にして、名前の声。
- 私は文字の徴にして、分離の顯示。

(『ナグ・ハマディ文書Ⅲ 説教集・書簡』
「雷・全きヌース」荒井献訳、105-118頁、
岩波書店、1998年)

反樂園思想としてのグノーシス主義

- 「反対の一致」の思想としての「存在解釈」
- 「反転」思想～善悪の反転、宇宙と反宇宙
- 天地創造の神は偽神であり、悪神？
- このようなグノーシス主義と天台本覚思想との距離
- 「樂園」と「反樂園」ないし「失樂園」との距離は？

中世的内観風景 「死」と「心」を見つめる 熊野観心十界曼荼羅図



死 →

← 心

← 誕生



熊野観心十界曼荼羅図

1, 上部には、
生老病死の四苦＝人間の誕生
から死までのライフサイクルが人
生坂道として四季を配しながら描
かれ、

2, 中部には、
円輪の中の「心」の字と、仏界、
菩薩界、声聞界、縁覚界、天界、
人間界、修羅界、畜生界、餓鬼
界、地獄界の十界が描かれ、

3, 下部には、
閻魔大王や施餓鬼供養や賽の
河原や八大地獄など死後の世界
が描かれている。

「地獄の沙汰も金次第」？

- 「地獄の沙汰も金次第」ではなく、
- 「地獄の沙汰も心次第」か？